

発行 長坂ふれあいのまちづくり協議会・神戸学院大学ボランティア活動支援室

前号で紹介しました読者アンケートにお寄せいただきました「知りたい防災情報」からピックアップして、専門家の方に回答いただきました。

Q. 認知症や障がい者が避難できる場所について
知りたい。



回答者
特別養護老人ホーム
永栄園 介護支援専門員
清水 孝二さん

はじめに

1995年1月17日、神戸に未曾有の被害をもたらした「阪神・淡路大震災」では、多くの高齢者、障害者等の要援護者が被災しました。

災害時の支援体制が不十分であったため、避難出来ず、倒壊の恐れのある自宅に戻る方、車いす用トイレが完備されていない場所で過ごした方、避難所で孤立する方、慣れない避難生活で体調を崩され命を落とされた方がおられました。

要援護者が安心して生活できる避難場所として、「福祉避難所」が設置されることになりました。

福祉避難所

避難所のうち、要援護者が安心して避難生活を送るために特別の配慮がなされた避難所です。小・中学校などの一般避難所では生活が困難な要援護者のために、市の判断で二次的に開設します。

二次的に開設しますので、要援護者はまず近隣の一般避難所へ避難し、区役所等の保健師が滞在・生活が困難であると判断した場合に福祉避難所に移動することになります。災害発生後、5日以内に開設することとしています。永栄園は、福祉避難所に指定されています。

基幹福祉避難所

2016年の熊本地震では多数の一般避難者が福祉避難所に避難したため、目的としている要援護者の受け入れが人手や物資不足のため十分機能しませんでした。

基幹福祉避難所は、大規模災害時(震度6弱以上の地震)や風水害時(警戒レベル3以上)、市の要請があれば、速やかに開設する神戸市独自の避難所です。神戸市内21か所の特別養護老人ホームが指定をされており、永栄園もその1つです。

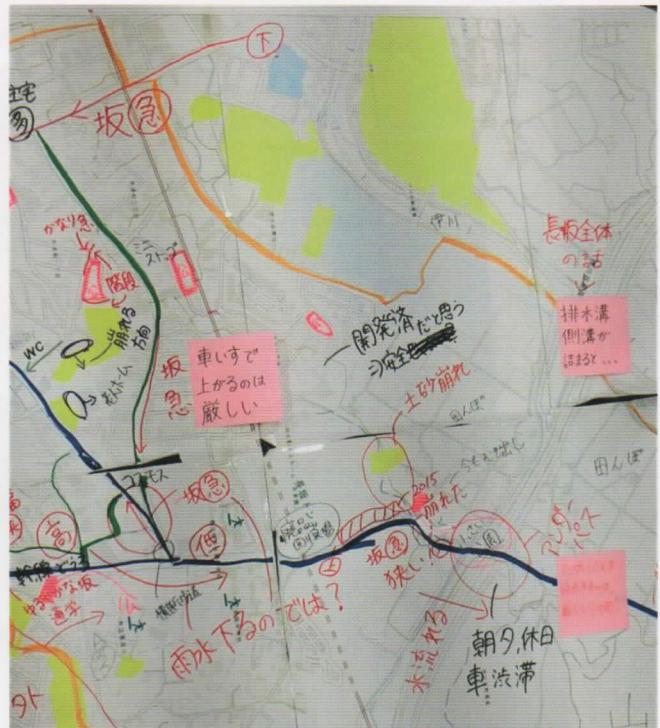
基幹福祉避難所についても、まずは一般避難所に避難していただき、区役所の保健師が対応し、支援が必要な方に限り移動していただくことになります。

大規模災害では、施設職員だけで運営するのは困難であり、地域住民の協力が得られる体制を作ることが大切と考えています。新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いたら、訓練参加のご協力をよろしくお願い致します。

長坂防災マップ



真剣なまなざしで話し合う参加者



「車いすで上るのは厳しい」など意見を書き込んでいく

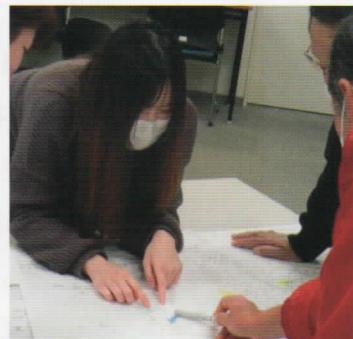
地域リーダーと共に

2021年12月19日、神戸学院大学ボランティア活動支援室学生スタッフ災害班は、長坂ふれあいのまちづくり協議会の皆さんと同大学有瀬キャンパスでワークショップを開催しました。これは、2016年に作成された「長坂校区地域おたすけガイド・ワークショップマップ」の改定を目的に行われ、地域の方から4名と学生4名の計8名が参加しました。



はじめに、ワークショップを始めるにあたり専門家としてこのプロ

ジェクトにご協力いただきいる防災学習アドバイザーの諏訪清二先生から防災マップの趣旨や作成上の注意点について説明がありました。



その後、高齢者や妊婦の方などといった多様な視点で災害時の避難について検討し、防災マップに必要な情報を書き出していきました。これらの作業を地域住民と学生の混合チームで行うことでの、学生からの視点とその土地に詳しい地域住民の視点を互いに共有し、長坂地区オリジナルの

防災マップの完成を目指します。当日のグループワークでは、両者の間で大変活発な議論が行われ、休憩時間も惜しんで意見交換が行われるほどでした。

学生の視点を活かす

今回のワークショップに参加した感想について地域の方からは、「学生の皆さんからの意見は私たちとは違う新しい視点なので、その都度納得した」という声が聞かれました。また、ワークショップの開催にあたって、事前に災害班の学生スタッフが現在の避難ルートを実際に歩いて点検していたことから、「学生さんによる事前の現地調査のおかげで、地図上に様々な情報を図示するのが容易だった」とのご意見も

完成に向けて

いただきました。

災害班の学生スタッフからは、「地域を知っている人の声を聞くことが大事だということを改めて感じて、その声をちゃんと反映できるように私たちも防災マップ作りを進めないといけないと思った」と、今後の活動への力強い決意が聞かれました。

協議を形にするのはこれから

今回、学生スタッフ広報班として取材で参加した私も地域の方とのグループワークに入らせていただきました。その中で、地域の方と学生が積極的に意見交換をしている姿を見て、地域と学生が協働で防災マップの改定へ

取り組んでいるという一体感を強く感じました。今回の活動で得られた多くの情報を災害班の学生スタッフがどういった形で防災マップへ落とし込むのか、今後の展開に目が離せません。

(学生スタッフ広報班 井上晴史)

学生の街歩きの様子をお届け

情報誌3号に記載したとおり、私たちはハザードマップを作成しています。2月13日にハザードマップ作りの最終確認のため、街歩きを行いました。今回の活動ではワークショップで地域の方から頂いた意見を基に避難施設やライフラインを確保出来る店舗の場所を確認しました。その施設の写真を撮ってマップに落とし込み、よりよいハザードマップ作りを目指します。



街には急斜面が多い



3回目の街歩き、青木君と宮崎君

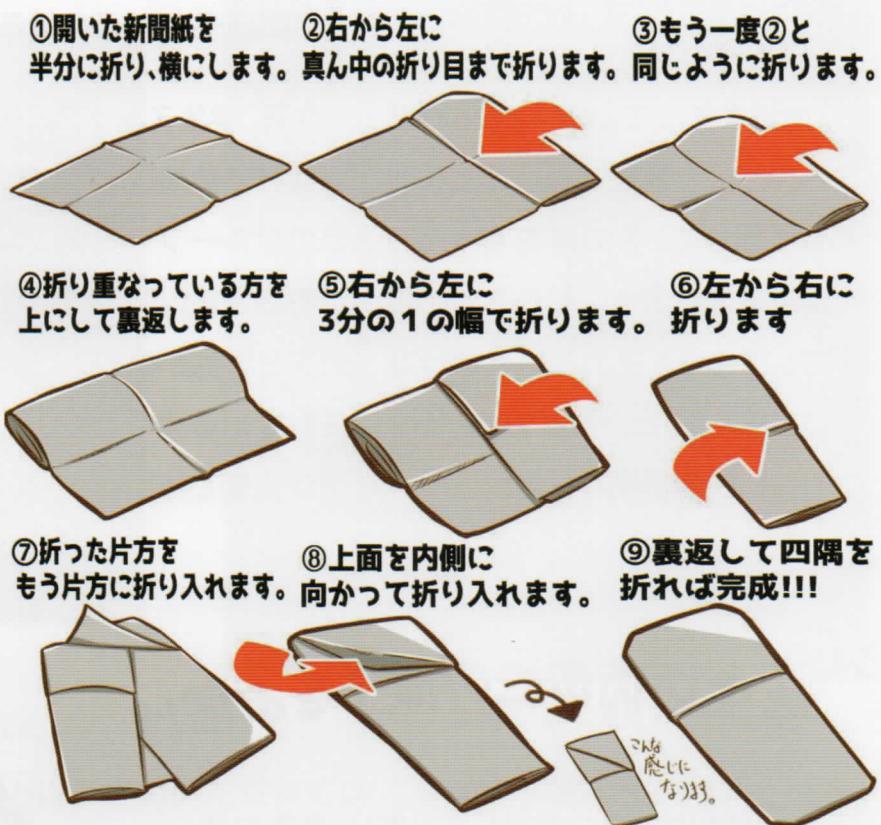
街歩きをして普段は気にとめない場所に災害時では危険が潜んでいることに気づきました。たとえば、道が狭い場所や広い場所の差が大きいため、広ければ避難しやすいですが、狭い場所になると逃げにくいと考え、避難ルートに改善すべき余地があると感じました。また、坂が多い分、高齢者や障害者、小さい子にとって逃げにくい地形であるため、逃げ方の工夫を考える必要があると考えます。より地域のニーズに合ったマップ作りをめざします。(学生スタッフ災害班 上岡結菜)

新聞スリッパを作ってみよう!!!

新聞スリッパを作る意味

地震が発生した直後は、家の中の物が落ちたり倒れたりして、壊れて破片が散乱していることがあります。そんな中で素足で歩くとケガをしてしまうリスクがあります。その為、スリッパなどの履物を履く必要があるかもしれません。

しかし、もし履物がなかった時に、身近な新聞で作れる新聞スリッパの作り方を知つていれば、ケガのリスクから自分の身を護ることができます。また、避難所での生活時にも、床の冷えや汚れから足を守る、健康面や衛生面でも新聞スリッパは役に立ちます。この機会に、ぜひ作り方を覚えてみて下さい。



(参照WEB) 備える.JP 備え・防災は日本のライフスタイル。
<https://sonaeru.jp/goods/handiwork/groceries/g-9/>

学生スタッフとして学んだこと



宮崎 瑠希也 人文学部 1年



吉田 真 靖 経済学部 1年

防災情報誌を作成するにあたって、地域の防災情報を調べると共に、長坂地域について詳しく知ることができました。また、地域住民の方々の阪神・淡路大震災の体験と我々がもつ現在の防災に対しての知識を交え、対談した結果、新たな課題が見えたことにいたしました。

今後は、課題改善のための具体的な活動に取り組もうと考えています。

学生スタッフがキャンパスのある長坂地域の方と連携して「もっと防災を身近に！」という思いを共有し情報誌を作成しました。このような思いを知っていただける良い機会になったと思います。

印象に残ったのは、第2号の「地域住民と学生の対談」です。日ごろからの対策が必要であることを改めて確認できました。